

# 本音のエッセイ

ほんね ほんね ほんね ほんね ほんね ほんね ほんね ほんね ほんね ほんね

## 「ちよつと待つて」「は、何分？」

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

嘉原 妙

「ちよつと待つて、つてどれぐらい待つて感

「手話と出会うの感覚的なものが、聴者の感覚的なものだ」とい

「中」という手話表現が、真ん中のイメージを想起させるからだ。手話と日本語、異なる言語と想起するイメージの違い。何も知らなかったことに恥ずかしさを感じながら、同時に、ろう者の感覚や認識世界にぐいぐい引き込まれていた。なぜ世界の奥行きがぐつと広がっていくのを感じたから。それは、アーティストの視点や表現に触れたときの、自分の価値観が揺さぶられるあの感覚に似ている。私は心の中で「わー！」と驚嘆の声をあげていた。

そう尋ねられて、正直少し固まってしまった。だって、これまで一度も考えたことがなかったから。

講座基礎編で、講師に尋ねられた質問だった。「ちよつと」は何分待てば良いか分からないから、「五分待つて」と具体的に伝えるのが大事だと教わった。「ちよつと待つて」。

「手話はイメージが大事」だと講師は繰り返し言っていた。相手の手話を見て、その人がイメージしているものは何だろうと想像し、自分のイメージと重ね、相手が何を伝えようとしているのか理解しようとするのが大切だと。それは、コミュニケーションの本質だ。私たち一人一人感覚も想起するイメージも違う。だから、ときに誤解や誤読が生まれ、悶

昨年、アートプロジェクトのコミュニケーションシビリテイへの視点を育むことを目指して企画・実

いつも何気なく使っている期日だと思う。これはつまり七月一日頃が期日だと思

手話やろう者の認識世界という、まさに異なる文化との出会いを通して、私は改めて、自分と他者との関わりについて捉え直す入口に立てたように思う。

「ちよつと待つて」「は、何分？」

「手話と出会うの感覚的なものが、聴者の感覚的なものだ」とい

それは、一七歳の私が美術に出会い、アートが今、私の生きる社会と私自身をつなぐ扉に見えたときのよう

「ちよつと待つて」「は、何分？」

「手話と出会うの感覚的なものが、聴者の感覚的なものだ」とい

その先にどんな風景が広がっているのかは、まだ分からない。だからこそ、今、まだ見ぬ世界への期待と緊張と共に胸が高鳴っている。



嘉原 妙 / アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

2010年よりNPO法人BEPPEU PROJECTでアーティストの作品制作サポートや市民と協働したツアープログラムの開発等に従事、2015年より現職。「東京アートポイント計画」、アートプロジェクトの現場を担う人材育成事業等を担当。